

第73回谷口ゼミナール研修合宿 田植え一



2007.6.9-10

甲南大学環境教
育野外施設(広野)



田植えについての事前指導



高大連携



「環境教育の実践」受講生

Sarah Turner, left, Shea and Damon Matthews



Kate Turner, left, and Judith Arney



w/ Sarah's Family

実施内容

6月9日(土)	1限 2限	国際環境教育ネットワーク「地球温暖化防止について」 // 「タイにおける地球温暖化防止のための活動と環境教育の取り組み」(e-Learning) 甲南大学 - タイ・プラナコーン=ラジャバト大学 ▶ 谷口 文章 教授(甲南大学) ▶ Dr. Siriwat SOONDAROTOK(プラナコーン大学) ▶ Dr. Chinatat NAGASHINHA(プラナコーン大学)	本校舎
	午前	甲南三学園(甲南小学校/甲南中・高等学校/甲南女子中・高等学校/甲南大学)環境教育・学習プロジェクト 田植え体験学習	広野

	午後	広域副専攻科目・環境学コース「環境教育の実践」 田植え体験・ビオトープ ▶高阪 薫 教授(甲南大学) ▶谷口 文章 教授(甲南大学) ▶西 欣也 准教授(甲南大学)	広野
	夕方	反省会・ゼミ合宿	
6月10日(日)	午前	田植え(補植)・片付け	広野
	午後	畑作業(夏野菜の手入れ・草抜き)	
	夕方	解散	

3回生 宮元 梨菜

6月9日, 10日の2日間, 甲南大学の環境教育野外施設(広野)において, 田植え合宿を行なった。

9日の午前中(1・2限)に国際環境教育ネットワークの講義で, タイのプラナコーン＝ラジャバト大学と甲南大学とを結び, リアルタイムでのe-Learningを行なった。今回の講義のテーマは地球温暖化であり, その現状を知ると共に, タイでの温暖化に対する取り組みについて学んだ。

その後, 午後から広野(神戸市西区)にある甲南大学環境教育野外施設で手作業による田植を体験した。私自身, 田植を体験するのは始めてであり, 苗の持ち方や植え方など, 一から教わっての田植となった。田んぼの中に入るとまず, 泥の感触を確かめた。泥は非常にヌルヌルとしており, 足元は非常に不安定である。また田んぼの中は想像以上に深く, 歩きにくい。午前中の激しい雨によって田んぼの水位が上昇した為, 植えたはずの苗の姿は見え, さらに浮き上がってきてしまっている苗もある。そんな悪条件の中での田植ではあったが, すぐに泥の感触にも慣れ, 気付けば夢中になって苗を植えていた。

もしもこの田植が手植えではなく機械によるものだったならば, 田植の大変さはそれほど感じられなかったかもしれない。また裸足だったからこそ泥の感触を実際に味わえたのであり, 田んぼの中に生息しているたくさんの生物にも気付くことができた。私は今回の田植を通して, 米を育てることの大変さ, 食べ物の有難さを, ほんの少しではあるが身を持って感じる事ができたように思う。しかし本当の大変さはこれから体験していくのであり, 有難さというものも自分たちが育てた米を口にした時にこそ感じられるものなのではないかと思った。

広野の畑においては, 夏野菜の手入れを行なった。私が担当したのはトマトである。葉の付け根から出ているわき芽を取り除き, そして主の茎が真っ直ぐ伸びるように, ひもを8の字状にして茎を支柱にくる。初めてのことで戸惑いながらも, 一つ一つ教わりながら真剣に取り組んだ。トマトを育てるには, 様々な手入れを施していかなければならない。しかしそれら一つ一つの手入れに無駄なものなどはなくて, 美味しいトマトを作り上げる為にはどれもとても重要な作業ばかりなのだと感じた。またこの体験は田植の時と同様に, 食べ物の有難みや, それを作ることの難しさについて考えるきっかけとなったように思う。

今回の合宿は, 色々なことを体験して多くのことを学んだ, 非常に充実した二日間だったように思う。しかし反省すべき点も多くあった。ゼミ生としての役割がきちんと果たせなかったということである。私は受講生らを指導するという立場にありながら, ほとんど何もすることができなかつたのである。今回の合宿において一番強く感じたことは, 誰かに指示してもらおうのを待つのではなく, 自分から積極的に動いて仕事を見つけなければならないということである。自分の行動に責任を持つことの大切さを十分に認識しつつ, 今回学んだことを次に繋げていきたいと思った。

またすぐには分からなかったが、9日午前中に行なった国際環境教育ネットワークの講義を通じて、地球温暖化問題の深刻さを知ったが、9日午後からの田植えやビオトープ、農作業の現地学習などを通して、生態系の多様さや大切さを学び、生物多様性の問題と地球環境問題が深く関わっていることも実感することができた。

3回生 山縣亜梨沙

今回初めて田植えの経験をした。小さい頃に田んぼの中に入って遊んだ記憶はある。泥まみれになり、必ず片方の靴を泥の中に沈めて家に帰っていた。私にとっての田んぼは遊ぶ場所であり、まさか自分が田んぼを作ることに関われるなんて思ってもみなかった。

9日の午前中はあいにくの大雨で雷もなっていて、とても田植えをできる状態ではなかった。楽しみにしていたのにと残念がっている小学生の言葉を聞き、同じ気持ちでいた私は小学生と目が合った瞬間思わずうなずいてしまった。

悪天候に備えて準備していた食品汚染に関するビデオを見た。記録としてカメラを持っていた私は部屋の中を歩き回りビデオを見る小中高生の姿を見ていた。小学生たちはみんなテレビの周りに集まりじっと見ていた。それとは正反対の態度をとっていたのが中高生で、中には自分たちもビデオを見なくてはいけないのかという質問をする生徒もいた。小中高生と一緒に見るビデオを選ぶのはすごく難しい。小学生の興味をひけるビデオだと中高生は退屈してしまっている様子だったし、中高生の勉強になるようなビデオだと小学生には難しく理解できずに飽きてしまうだろう。そもそも田植えを楽しみにしてやってきた子供たちに、田植え以外の何かで楽しませたり学ばせたりすることは非常に難しいことだと感じた。その後雨が止み、なんとか田植えができそうな天気になった。みんなで田んぼに行き、あまり時間がないこともあり早速田んぼに入っていった。

私自身が田植えを経験して一番強く感じたことは土の感触だ。裸足になって足を踏み入れると、足は思っていた以上に深く沈み込んでいった。水は少し冷たかったが土の中はどことなく暖かい感じがした。普段の生活の中には、裸足で田んぼの中に入れる機会はない。非日常的な体験だったが、私たちの食生活に大きく関わっている田植えを経験できてうれしかった。そして、これからお米になるまでの過程に関われることがとても楽しみで期待の気持ちでいっぱいだった。お米を食べるのは簡単で一瞬の出来事なのに、それに比べると稲からお米になるまでの過程はとても長いように感じる。食事の前後に言っていた、単なる習慣でしかない「いただきます」「ごちそうさま」の言葉に意味がもてるようになったと思う。

ゼミ生としては、指導ができるようにもっと知識を増やしたり実際に自分で体験してみたり、やるべきことや課題はたくさんある。しかし環境教育の実践の受講生として、一人の大学生としてとても大きな経験であった。このように感じられる経験を、これから少しずつ増やしていきたいと思う。

